

タイトル：2020年度（令和2年）研究セミナー（第21回）

日時：2020年12月19日（土）～20日（日）

オンライン開催

「ハランのサービア教について」

江原 聡子（東京大学大学院総合文化研究科 博士後期課程）

9月の「教育セミナー」に続き、AA研での今年2回目の発表を「ハランのサービア教について」のタイトルでいたしました。今回発表に關しての私の中での目標は、12月26日締め切りの「博士論文構想届」（在学している大学の専攻事務提出）の内容を充実させるというものでした。まだ構想段階ながら、ようやくまとまり出してきたものをもう一段階ブラッシュアップするヒントをいただけないかと考えたことから、今回の応募に踏み切りました。

私の研究テーマは、「北シリアの都市ハラン **Harrān** のサービア教とサービア教徒について」ですが、なかなか実態の掴みにくい宗教で、なおかつハランはシュメルの都市国家に遡る古代メソポタミア文明期に起源を持つ伝統を受け継いでいる面もあり、イスラーム期のハランの宗教伝統をどのように論じるべきかかなり悩ましいところがありました。例えば、前6千年紀後半から前5千年紀にかけてメソポタミア北部に広まっていたハラフ文化に起源すると思われるビーハイヴ・ハウスは今日もハランを含めた北シリア全域に見つかりますが、この件をハランのサービア教徒の代表的存在とされるサービト・イブン・クッラ(826-901)の思想と共に博士論文中で採り上げることができるかどうか。ハランのサービア教徒はギリシア思想をイスラーム世界に伝え、同時に古代メソポタミア世界に起源する神々のための祭儀をも行なっていた人々であり、このようなさまざまな時代の文化伝統の共存する様相を論じ得るものかどうか、あぐねておりました。このような課題になんらかの方向付けを見出せないかというのが、今回の発表の形となりました。

しかしながら発表時間約1時間、色々の議論が尽きず大幅に伸びた質疑応答時間約1時間40分という、めったにない体験が、私に大きな力を与えてくれたように思われます。厳しいご意見も多くいただきましたが、先生方の少しでも良い方向に導きたいというご熱意が本当にありがたかったです。複数の視点を持ちつつも、どのようにテーマを収斂させていくべきかのヒントが私の中で見えてきたように思われます。また司会をお勤めくださ

いました飯塚先生のご采配も本当にお見事であったと感謝申し上げるばかりです。今回の発表を糧に、博士論文執筆へ向けてさらに努めていきたいと決意を新たにいたしました。また博士論文構想届を無事提出できましたことも、ご報告させていただきます。

9月の発表も zoom で、接続や音声が不安定になることが何度かありましたが、今回の発表ではそのようなこともなく、先生方や運営に携わっておられる皆さまのお心遣いを本当に嬉しく感じました。皆さま、本当にありがとうございました。(了)